

教育委員会協議会 会議録

平成 30 年度第 6 回教育委員会協議会

場所：きらら大正 多目的ホール

(1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成 30 年 7 月 17 日 (火) 18 : 30

閉会 平成 30 年 7 月 17 日 (火) 20 : 11

(2) 教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	伊藤 博明
	教育委員	平田 健一
	教育委員	竹島 晶代
	教育委員	八田 章光
	教育委員	木村 祐二
	教育委員	中橋 紅美

(3) 高知県教育委員会会議規則第 8 条、第 9 条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長 (総括)	岡村 昭一
〃	教育次長	高岸 憲二
〃	教育次長	長岡 幹泰
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	高等学校課課長	竹崎 実
〃	高等学校課企画監 (再編振興室長)	山岡 正文
〃	高等学校課課長補佐	藤田 優子
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子
〃	教育政策課主任指導主事	小島 文晴 (会議録作成)
〃	高等学校課指導主事	石丸 右京 (会議録作成)

【開会】

伊藤教育長	<p>県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関します、平成 30 年度第 6 回高知県教育委員会協議会を開会させていただきます。県の教育長の伊藤と申します。よろしくお祈いします。</p> <p>本日は皆様方、大変お忙しいところ、森副町長様はじめまして川上教育長様、皆さん多数お集まりいただきました。誠にありがとうございました。今日の会議は本年度 6 回目、通算で 16 回目の教育委員会協議会となりますが、窪川地域で先週金曜日に行われた第 5 回に続いての開催となっております。昨年度 1 月には地域の皆様方からの意見聴取としまして、四万十町で協議会を開催しご意見をお聞きし、3 月には四万十町内の 2 校、窪川高校と四万十高校の学校の在り方についてご協議をしていただいたところです。今年度に入りまして、4 月の第 1 回協議会では、四万十町内の 2 校についての検討案を 3 案とさせていただきました。そして 5 月に引き続き両校の在り方について協議を行ったところでございます。</p> <p>安芸でも安芸高校と安芸桜ヶ丘の協議がございまして、安芸市の場合には両校が距離も近いということで 1 回の協議会でございますけれども、こちらは両校、一定の距離がございますことから、先ほど言いましたように、先週窪川地区で会</p>
-------	--

中橋委員	<p>を行い、今回、大正地区で会を開催させていただくということになりました。</p> <p>13日に行われました窪川での会議と本日17日の会議で、四万十町の2校の関係の皆様からご意見をお聞きすることとなっております。この二つの会議を通してご協議をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。</p> <p>それでは、本日の議事録署名人については、中橋委員にお願いします。よろしくお願います。</p> <p>はい。</p>
------	---

【議題】

(1) 事務局説明

伊藤教育長	<p>議題の県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」におけます四万十高校の在り方について、高等学校課から説明をお願いします。</p>
山岡企画監	<p>高等学校課企画監の山岡と申します。資料について説明させていただきます。</p> <p>資料1の1ページをご覧ください。資料1は後期実施計画の策定に向けて協議してきたこれまでの教育委員会協議会での意見の概要です。</p> <p>1の今年1月に地域会を行い、その地域会で出されたご意見は、参考資料4の右から二つ目の欄に掲載しています。参考資料4につきましては、あとで説明させていただきます。</p> <p>平成26年10月に策定しました「県立高等学校再編振興計画」では、本校の最低規模を1学年2学級以上としています。窪川高校、四万十高校などの中山間地域の学校は、地域の学びの機会を保障するために、特例として1学年1学級20人以上としています。2の平成30年2月13日の全体会では、その点を議論しました。原則1学年2学級以上、特例として1学年1学級20人以上という最低規模の基準は尊重すべきであるが、その数字だけに捉われることなく検討すべきであるとされました。</p> <p>3の平成30年3月28日の全体会では、各学校の在り方の方向性を協議しました。そこでは、中山間地域の厳しい条件があり、生徒数の確保にはつながっていない、教育格差が生じない方策を考えないといけない。四万十町からは熱心な提案もあり、地域と一体となった振興策を考える必要がある。町の思いもあるが、それがいつまでということも検討する必要がある。生徒数の減少の中、高校教育の質の問題、保護者の経済負担、県の地域振興策や高校の役割などを踏まえ検討する必要がある。生徒確保のためには、中高一体化も検討する必要がある、その地域の中学校が力を入れているクラブ活動とのつながりを深める。また、ICTを活用して切磋琢磨できる学習環境を整えるといった意見がありました。</p> <p>4の平成30年4月23日の全体会等を経て、7の平成30年5月23日の定例教育委員会において、生徒数の減少を踏まえ、窪川高校と四万十高校の学校の在り方について、三つの案が「中間とりまとめ」に盛り込まれました。三つの案をご説明いたしますので、5ページの資料2をご覧ください。</p> <p>まず、案3についてご説明します。検討材料として、窪川高校と四万十高校の入学者数の実績と将来推計を載せています。平成30年度入学生は窪川高校が25人、四万十高校が18人ありますが、平成38年度入学生は窪川高校が29人であり、40人を下回る見込み、四万十高校が12人であり、20人を下回る見込みで</p>

す。このように1校としての規模が小さく、多様な学習ニーズや社会性の育成、部活動などの点で、このままでは高校教育の質を確保することが難しい状況にあります。こうした観点からは、活力ある学校づくりを進めるため、下の表にありますように両校を統合し、どちらかの校地に一本化する案です。案3は、表の右にありますように、一定の生徒数を有して、活力ある教育活動が展開できる、高校教育の質が一定担保されるというメリットがある一方、地元で学べる場所がなくなる、人口流出に拍車がかかるといったデメリットが考えられます。また、地理的な状況、経済的な負担、交通機関の整備が十分でないといった実態から、自宅からの通学が困難になる生徒への対応が必要となるといった課題もあります。

1月の地域会では、窪川高校と四万十高校についてご意見をいただきました。参考資料4をご覧ください。右から二つ目の地域会でのご意見の欄をご覧ください。窪川高校の丸の五つ目の後段では、育つ環境で教育格差が生じないよう、中山間地域の学びの場の確保をお願いしたい、あるいは四万十高校の丸の九つ目では、大正、十和の山間地域では、さらに30分、40分と時間がかかる集落があり、そういったところから通学している生徒がいるといった意見がありました。資料2にお戻りください。高等学校の教育の質の確保に重点を置いた場合には、案3のように統合して校地を一本化するという考え方になりますが、地域会でのご意見、そして中山間地域から高等学校がなくなった場合の影響の大きさも考慮した案が案1や案2です。

次に案2について、ご説明します。案2は統合するけれども、窪川高校の校舎と四万十高校の校舎の両方とも引き続き活用するものです。いわゆるキャンパス制と言われるもので、両校の校舎を利用するものです。キャンパス校は参考資料3でのちほど説明しますが、複数のキャンパス、校舎を持つ一つの学校のことで、案2は、統合したうえで両方の校舎を利用するものですので、表の右にありますように、地域に学べる場がある、地域に活力が出る、学校を拠点とした移住促進策や地域活性化策を展開できる、一定の生徒数があるので活力ある学校行事や部活動ができる、といったメリットがあります。その一方で、キャンパス間の移動時間がかかること、移動時間の確保が必要となってくるといったこともあります。また、合同行事ができる反面、それぞれのキャンパスの独自性が弱くなるといったデメリットも考えられます。合同の行事を行う場合は、一定活力ある教育活動を展開できますが、通常の授業を行う場合などはやはり小規模のキャンパスに分散しますので、高校教育の質の確保や活力ある教育活動をどうやって担保していくのが課題となってきます。

最後に案1についてご説明します。案1は両校とも現在のまま、本校として存続しようとする案です。地域に学校が残る、地域連携により、地域活性化が図られる、移住促進の施策を展開するうえで学校の存在は大きい、といったメリットがあります。その一方で、生徒数の減少により、学校行事や部活動の面で活力が失われるのではないかとといったデメリットも考えられます。生徒数がさらに減少すれば、選択科目が開設できない可能性もあるといった課題もあります。

資料2の表の上に記載していますとおり、2校で存続するという案1になった場合は、今後、窪川高校と四万十高校のそれぞれで活性化策を考えていく必要があります。生徒数が少ない中でどう社会性を育成していくのか。生徒数を確保する方策として、どうしていくのか。学級数や学科等の見直しも含めて、今まで以上に効果的な方策を検討していく必要があります。

統合するという案2または案3となった場合には、統合校の活性化策を検討し

ていく必要があります。学科編成や学級数、学科、専攻をどうしていくのか、部活動の魅力化、市町村立中学校との連携をどうしていくのか検討していく必要があります。

案1、案2、案3のいずれに決まっても、それで議論が終わりではなく、それから各校の活性化策、あるいは統合校の活性化策を検討していく作業が求められます。案1と案2は、表の右を見ていただくとお分かりのとおり、メリットの三つが共通しているなど、似た部分があります。どこが違うのかと聞かれます。違いの一つは部活動でございます。3ページ、参考資料3の2の(2)の力をご覧ください。野球や一部の競技は除きますが、キャンパス校は一つの学校なので、キャンパス同士の合同練習の実績があれば、一つのチームとして大会に出場し、勝ち上がればブロック大会や全国大会に出場できるという点です。無条件に認められるわけではなく、学校全体として一体的な教育活動をしていること、そして日常的な合同練習の実態があることを申請して、一体であると判断された場合には一つのチームで出場可ということのようです。

違いの二つ目は、案2のキャンパス制も統合であるので、学校名や校歌、校章、制服なども基本的に変わります。新たな学校名を考えなければなりませんし、校歌、校章、制服を検討する必要もあります。また、校長先生も1人になります。

また、窪川高校と四万十高校の間の距離は20キロメートル以上あります。時間にして片道約30分、往復約1時間あります。キャンパス制の場合、両キャンパスの時間や距離を考えると、どれだけ頻繁に部活動の合同練習や合同の授業ができるかという問題もあります。部活動の合同練習も現実的には土日に限られ、合同の授業もそれほど多くないとも考えられます。部活動で一つのチームで出場するためには、学校全体としての一体的な教育活動と日常的な合同練習の実施がある場合に認められることですので、運用の面にも関わってきますけれども、両校の時間や距離を踏まえて学校全体としての一体的な教育活動、日常的な合同練習がどこまでできるのかも検討課題となってきます。

このように案1～案3までには、それぞれメリットやデメリットがあります。地域の実情や学校の特色、市町村による支援の実態なども踏まえて、両校にとってより良い選択をしていく必要があると考えています。

教育委員会協議会でのこれまでの議論に戻りたいと思います。2ページをご覧ください。4の平成30年4月23日の全体会の意見は、案1の存続は数年後に入学者が1桁になる推計であり、慎重な検討が必要、案2のキャンパス制は振興策の検討が必要、案3の1校への統合は時期尚早、あるいは子どもたちのメリットを示して、案1か案2で地域の方と協議を進める、キャンパス間の交流やカリキュラム、移動手段なども勉強したい、小中高連携を見据えて、何らかの形で地域に学校を残したい、現状では両校の維持は難しく、いずれにしても移動が必要であれば統合もやむを得ない、といった意見がありました。

続きまして、5の平成30年5月14日の全体会では、案1については生徒数の減り方を見ると厳しい、あるいは問題の先送りではないか、子どもたちにデメリットが大きい、といった意見がある一方、キャンパス制が実現可能なのかと思うので、案1か案2で検討したいといった意見もありました。中山間地域の活性化の取り組みで、何らかの形で高校の機能を残す必要があり、案2のキャンパス制を中心に検討していく必要があるという意見や、キャンパス制の場合もキャンパス間の移動において生徒に危険がないよう、バスで安全確保が必要といった意見もありました。一方、キャンパス校として移動手段を確保するのであれば、案3

で統合したうえでその交通手段を確保した方がメリットがあるのではないかと
いった意見もございました。

こうした協議を経て、6の平成30年5月18日の全体会では、3ページの点線
枠囲みにありますように、両校を統合する案、両校を統合し、キャンパス制とし
て両校の校地を利用する案、両校を統合し、どちらかの校地に一本化する案の三
つの案を中間とりまとめに盛り込むことにいたしました。

続きまして、参考資料1をご覧ください。両校の生徒数の推移です。先ほど、
資料2でご説明しましたが、平成30年度入学生は窪川高校が25人、四万十高校
が18人。平成38年度の推計は窪川高校が29人、四万十高校が12人となってい
ます。全校生徒は平成30年度は窪川高校が90人、四万十高校が50人。平成38
年度の推計は窪川高校が82人、四万十高校が29人となっています。

参考資料2をご覧ください。東部地域の中学校卒業生数の推移です。平成30年
3月の四万十町の卒業生数は112人でした。平成31年3月は148人と増加しま
すが、その後の7年間は平均109人程度というふうになります。

参考資料3をご覧ください。キャンパス校とは、複数のキャンパスを持つ一つ
の学校のことです。キャンパス制には2種類あり、本校分校型とキャンパス校型
があります。本校分校型は図にもありますように、本校、分校としての独自性は
ありますが、一つの学校です。キャンパス校型は対等な関係にある複数のキャン
パスを持つ一つの学校というものです。案2としてお示ししたのは、キャンパス
校型の方です。キャンパス校型の場合、イにありますように、キャンパス制も統
合の一つですので、校名は〇〇高等学校で統一され、各キャンパスは〇〇高等
学校〇〇キャンパスとなります。また、ウにもありますように、統合ですので、
校歌、校章、制服も基本的には同じものとなります。エにありますように、授業
は原則としてそれぞれのキャンパスで行います。教員が移動する場合や、生徒が
移動する場合もあります。オの学校行事や式典は原則として合同で行います。カ
の部活動は、先ほど説明したとおりです。一つのチームとして出場するには、学
校全体としての一体的な教育活動と日常的な合同練習の実態が必要となってき
ます。10ページをご覧ください。キャンパス校として具体例を記載しています。
他県では学校に地域を残す方法として、キャンパス制を導入したようです。先進
例のキャンパス間の距離は10キロや7キロ、1キロ、2キロとなっております。
移動方法はバス会社に県費で委託する例が多いです。また、校長先生は1名で校
舎間を行き来する例が多いということになっています。

11ページをご覧ください。一番右の欄に後期実施計画における学校の在り方
の方向性を記載しています。存続、キャンパス制による統合、校地の一本化の統
合のいずれになっても、中山間地域にある学校として引き続き、活性化策、振興
策を真剣に考えていく必要があります。

12ページをご覧ください。スケジュールを載せております。この教育委員会協
議会は平成29年度に10回、平成30年度は3回にわたり教育委員会協議会を開
催しており、5月末に中間とりまとめ、たたき台を決定公表しました。その後、
2回協議会を開催しています。統合を含めた検討校として学校関係者等を招い
て、学校の在り方について協議する場が、13日に四万十町役場で開催した会と本
日の会です。このあと、9月に教育委員会協議会の全体会を開催するとともに、
定例教育委員会で最終とりまとめパブコメ案を決定する予定です。パブリックコ
メントを実施して、年内には後期実施計画を策定したいと考えております。

説明は以上でございます。

伊藤教育長	<p>ありがとうございました。それでは、ただ今の事務局の説明につきまして、ご質問、ご意見がありましたらお願いします。よろしいですか。</p> <p>ありがとうございます。</p>
-------	---

(2) 学校関係者からの意見聴取

伊藤教育長	<p>学校関係者の方々から意見をお伺いいたします。4人の方々にご意見をお伺いするようになっておりますので、順番にご意見をお伺いしまして、終わられましたらそこで一括で質疑をお願いしたいと思います。</p> <p>最初に、四万十高等学校教育振興会の林健三様からご意見を賜りたいと思いますので、どうかよろしくお伺いいたします。前へお願いします。</p>
教育振興会 林健三氏	<p>こんばんは。本日は、高知県教育長さんをはじめ、委員の方、そして高等学校関係の方、本当に残暑、猛暑の続く中、本当にご苦労さまでございます。</p> <p>まず、振興会といたしまして、6月に改選がありまして、私、それまで会長職をやらせていただいた経過がありまして、今日の報告会に臨むわけでございます。今まで8人の校長さん、私、PTAの会長、いろいろ方と一緒にさせていただきましたが、今回、新聞でも出たように三つの案、統合、そしてキャンパス制、そして存続というような話も出ておりましたが、先の尾崎知事が19の施策があったわけですね。地域の考え方には感動したと。学校を残さないかん、というような一般質問の答弁で、そういう答弁を知事はしております。私も、もしここが、四万十高校がなくなるとなった場合に、学生が町筋を通らなくなるというのはあると思います。だから町が18年に1村2町が合併しまして、四万十町が誕生しましたが、本当に合併していかざったなというような感慨が私はあります。私は一合併反対の人間として、もし学校がなくなった場合どうしても経済面で違ってくる、というような考えを私は持っております。</p> <p>その中でも私、最初のPTAの会長のときに里親制度という制度を設けたわけです。その中で私、兵庫の子どもだったですけど3年間同じご飯を食べて、風呂へ入り、そういう面倒を見てきました。その付き合いも今まで以上に付き合いがありまして、毎年私の家に来てくれて、お酒を交わしながら昔話もしたりというような話もすることです。</p> <p>今、私も一四万十町の議員としてやっているわけですが、町の執行部からもクラブの強化のために補助金、これは本当は県からいただかないかんとは思いますが、ここの四万十町といたしまして、旧の大正の時代から制服の問題とかずっとやってきてもらった経過があるわけです。私たち議員としても、どうしてもクラブの強化をせないかんということで、今、パシフィックウェーブの立石先生に来て指導してもらっている、その補助金も県ならびに町村からいただいております。そして、通学の補助金なども町からいただいております。</p> <p>今年に入りまして、3月でしたか、寮費が48,000円という高額な寮費でありますので、それをみてもらいたいということで、陳情書を前におった豊嶋校長から早めに出してくれということで出していただき、私たち協議の中で検討した結果、全会一致で可決しました。そして、本会議に入りまして18人の議員全員が認めてくれて可決ということで、それも通っております。寮費の問題、そして通学の補助、そしてクラブ強化の補助金とか、まだやり始めて2年ぐらいいかまだ</p>

経っていないわけで、今、生徒数が減っていると言っておりますが、今年は少し伸びたように思っております。

今までクラブの強化の中でバッテリーを組んでいる両方、キャッチャー、ピッチャーとかいうのは、全部市内の学校へ抜かれていくわけですよ。それが今年抜けたのはたった1人だけだったと思います。そして来年は生徒数もこの数字にありますように、非常に卒業生も多いわけでございます。また、吹奏楽部の中学校からジャズをやっている女の子たち、男の子もそうですけど、おるわけですが、ジャズをしたくて今、四万十高校と中学校との連携ができて、高知へ行きたい子がやめて、四万十高校へ今年大分、上がってくれたというようなこともあります。これも全国的にジャズというのはこの中学校だけではないかなとは思っておりますが、大川村がやっている山村留学ですね、そういうものを全国レベルで集めて中学校を盛り立てていけば、高等学校も自然に上へ上がって、一緒に合同練習もできるというようなこともできるのではないかと思っております。

四万十高校では、自然環境コースというコースがあるわけです。何で高知市に行くかって、工業です。工業系で免許が取れるわけですよ。溶接2級とか3級とか。自然環境の中でも、そういう全国的に科がたくさんあるわけです。将来的にその仕事でやれるような仕事があるんじゃないかと、私は思っております。それは県の関係で検討してもらわないかと思っておりますが、例えばカヌーですよ。カヌーのインストラクターとして働けるとか、ドローン、自然環境コースへ行って、そのドローンの免許、それは農業分野、山林、それからあといろんな観光でも使える面が出るんじゃないかと思っております。自然環境コースへもし行って、そのドローンの免許の資格が取れるとか、カヌーの免許とか取れたら、全国レベルでもある程度何人か中学校で足らん分は補っていただけるのではないかと思っています。

私が会長のときに5人ほど県外から来ておりました。寮もそのときなくて、里親制度で面倒みてもらったような経過があるわけです。それを私有地に、寮も足らんということで県の方をお願いしたときに、まだ合併していないときでした、町長に相談に行きました。町長が「寮をやらないかんやったら、うちの土地を使え」ということで、材も町が提供してくれました。PTAの保護者の関係とかという形で、県の方からは1億ぐらいいただきまして、それを校長、教頭、教職員が皮剥ぎをしながら寮を建てたような経過があるわけです。

設備とは言っても、寮はすごい立派な寮でログハウスの食堂があり、1人部屋の部屋を20室でしたか、構えていると思います。そういう関係もありますので、中学校から連携しながらジャズ、そしてソフトボールは小学校4年生から、本当に中学校も全国レベルへ行けるような選手がたくさん育てております。私はそのパシフィックの立石君には期待をしているわけでございます。ここへ来てソフトボールをやって、全国を制覇するというような夢も可能ではないかと。ここがもし上の四万十高校へ上がってくれば可能なことではないかと思っております。

いろんな面で今から言ったように、自然環境コース、そして普通科もですけど、いろいろ町としても「じゅうく。」の開設、そこで勉強させて国立、私立の大学へ進学さすというようなことも執行部は考えているようでございますので、その辺もよろしく願いをしたいと思っております。

そして、四万十高校は給食がないわけです。それを道の駅でつくっていただき、価格もかなり安く提供してくれておりますので、生徒たちも喜んでいただいているというような話も聞いております。

いろいろな面でまた、執行部からの手厚い活動はまだ2年ぐらいしか経っておりませんが、今からの段階でございますので、私はその辺を教育委員の方々にも頭に置いていただきたいと思っております。先ほど言ったように、知事も答弁の中に地域の方々の学校を残さないかんといいふうな考えを、切実に感じたというような答弁をしておりますので、その辺も何とぞ、委員の方には参考資料にさせていただきたいと思っております。

取組の話になりましたが、まだあとも控えておりますので、それから今日はたくさんのお客さんも来て、熱心に聞いていただいておりますので、外野の方からいろいろな意見が出ると思いますが、その辺もよく聞いていただきたいと思えます。これで私の報告は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

伊藤教育長

どうもありがとうございました。それでは、次に四万十高等学校同窓会の門脇会長様から、ご意見をお伺いしたいと思います。どうかよろしく願います。

同窓会会長
門脇氏

同窓会の門脇です。よろしく願います。本日は大変お忙しい中、委員の皆さん、そして教育委員会の皆さん、誠にありがとうございます。大体この会の流れというか、私たちの発言は振興会の林さんがメインの話をさせていただいて、私たちは以下三人、同窓会、守り育てる会長、PTA会長さんが補足等あれば話をさせていただくつもりでいましたので、話の流れで全然組み立てておりませんので、お聞き苦しい点がありましたら申し訳ないですけど、よろしく願います。

私の方としましては、最近どうしても目を向けていけないといけなのは生徒数の減少で、昨年、一昨年より学校の先生方と話をし、今、学校に来ていただいている教員もこれから、学校に置かれている子どもたちをお持ちのお父さん、お母さん、子どもたちに対してどうやって周知を図っていくか、在校生がどれだけ頑張っていくて、どういった進路へ向かっているかというのを説明する場所が必要だろうということで、一貫教育学校の中学校区になります北ノ川、大正と十和、それで小学校しかないんですが、昭和地域にも出向いて、いろんな話は保護者の方とさせていただきました。

その中で、進学等々でもいろんな心配事、四万十高校って無くなるの？とか、そういった話が先走ってしまって、実際のところ話が伝わってなかったという現状がありました。それで学力テストの結果で、どうしても高知市内校に比べると学力が確かにそんなに高い子がいないとか、そういう実情もあります。もちろん、高い子もおります。国立であったり、昨年は立教とかに入った子もおりますし、そういった中でDの子がCになれたり、Cの子がBに上がったり、そういう学力テストの四万十高校に入ってから伸びた実情があります。あと進路であった就職先、いろんなことを情報提供いただいて学校側と連携して地域に出向いていって説明させていただくと。今までそういう機会が全然なかったので、こちらでも発信してなかったんですけど、そういうことを踏まえてこういう情報発信、情報提供、説明会とかということがすごい重要だなということは感じました。今後も学校等ではマスコミの方とか、いろんなこと連携させていただいて、こういう情報を発信させてもらえれば、少しは四万十高校を選択肢の中に入れてもらえるのかなと反省をしたところでした。

最近では部活動の支援をいただいたり、また町からは、町営「じゆうく。」の支援をいただいて、学力が伸びるようになっておりますし、あと今回は生活面、寮、県内で1番高い水準の四万十高校の寮なので、それを何とか低い水準に下げさせ

てもらえれば、今、町外県外の子しかいないんですけど、町内の遠隔地の子ですね、汽車、バス、それで駅からまた保護者がそこへの送り迎え、1時間近くかかる子どもたちもおりますので、そういった方々にも門を開けて、通えるというか、寮に入れる手段の一つとしていただければ、その通学時間をもっとほかの有効な勉強であったり、部活動であったりという方向に使っていただければ、また家庭での検討材料にもなるのかなというふうに考えています。

私事なんですけど、私も同窓会の本校出身で、妻が窪川高校です。それで3人子どもがおるんですけど、3人とも四万十高校に行っています。それで20年ぐらい入学から3～4年かけて3人、その1番上の子のときには40名、50名近く1学年におったと思います。それから年々年々減って、1番下の子のときに30数名ですから、私の娘のクラスには10数名だったと思います。その中でも、少人数ならではの行き届いた教育であったり、人間的な付き合いがあったり、先生方にも本当に手厚く指導いただいて、1番下の子だけちょっと題材にするんですけど、入学した当時はとても大学に入学するような感じではなかったんですけど、入ってだんだんだんだん意識改革させていただいて、順にステップアップして、また人数が少ないので生徒会なんかでも活動する場があるので、そういったところでいろんなところへ出て行って、結局、公立の大学に行かせていただいて、今、この春、ソーシャルワーカーの卵として一応、巣立って行って、そういうことでも我が家は一番四万十高校のメリットを存分に活かしているかなと実感しています。1番上の子も専門学校4年、行きました。2番目の子はそのまま県内に就職したんですけど、今、1人は町内で就職しています。それで2人は県内に2人、高知市内で2人行って、機会があればやっぱり地元に戻って来たいという気持ち強いんです。これはうちの家庭だけじゃないかもしれないんですけど、もちろん他の学校に行かれても、こちらへ帰ってきたいという強い思いで地域で活躍されている方たくさんおります。うちの子はそういったことで地域が今、特に強くなったと感じています。

そういったことで、先週の父母会、地域の会でも参加して聞かせていただいたんですけども、最後に傍聴者の中から、いろんな家庭環境があって就学が厳しい、通学が厳しい、生活が厳しいとかいう、そういったところをフォローできるのは、やっぱりこういった地域の学校が1番重要であるかなと考えます。そういったところのケアができるのは、こういった町の少人数ならではのなんですけど、そういうところで育っていく、バックアップがあるからこそ思っておりますので、この地域からも教育の場を継続させていただければと思います。

1案、2案、3案あるんですけど、やっぱり一本化はまず、それぞれ同窓会としても一本化はできておりません、正直なところ。やっぱり今、総会と役員会、それから最近この3案出された時点で、個々にいろんな聞き取りとか話し合いをさせていただくうえで、できれば地域のためにはと言うと、やっぱり1案が、継続が良いんですけど、四万十高校は窪川高校と違いまして、35年以降になると10人とか10人を切ったりする推移の生徒数の減少が目まぐるしくなっているんで、そういったことを一概に主張しても、やっぱり無理があるのかなという点も否めないところです。

それで充実した教育ができるかという、私たち将来まず第一に子どもたちなんで、子どもへの教育なんで、地域はもちろん大事なんですけど、そういったところを責任が負えるかという、なかなか私たちも自信がないところなので、そういった面ではキャンパス制というのも選択肢かなという、考えるところは多い

	<p>のは私の実感です。個人的な意見を言ってしまうましたが、私としてもなるべくならこの地域から学ぶ場所を継続させていただきできればと思いますので、よろしくお願いします。以上です。</p>
伊藤教育長	<p>どうもありがとうございました。次に四万十高等学校を守り育てる会の市川様から、ご意見をお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。</p>
守り育てる会 市川氏	<p>四万十高等学校を守り育てる会の市川です。今、2人の方が熱弁をふるわれた中で、言うことは多分、同じようなことだと思います。</p>
	<p>私の子どもも3名、この四万十高校、大正高校というところで育ちました。その子は1人は地元に残り、1人は隣の中土佐町に入り、1人は高知市。ふるさと運動ということで、3人ともが地域に帰ってきたいんだという意識が大変強く、それぞれの職の中で今の地におるといような状況です。</p>
	<p>実際には四万十町というのは3町村が合併しまして、大変広うございます。642.06平方キロメートル、淡路島よりちょっと広いというようなところでございますので、なかなかそこに一つの学校でどうこうというようなことも、なりにくいのかなと考えております。特に大正と十和地区については、窪川から考えてみますには1時間余りかかる。大正にすれば30分かもしれませんが、大正だけの話をするわけにはいきません。十和の話もしていかんといきませんので、そういう中においてはやはり四万十高校の意味合いというのは大変強いのではないかなと思います。</p>
	<p>そして、四万十高校が今までここ何年間取り組んできた学校の特色ということではございますが、その中にあっては、やはりジャズとソフトボールそして公設塾、この3本の柱が今、この四万十高校の中で根付いてきております。先ほどもちょっと話の中で出ておりましたけれども、子どもが入ったときには大変悪い成績状況であったとしても、それが徐々に徐々に上がって行って、卒業のときには大学に出せるような子どもができています。</p>
	<p>それを考えてみますには、小規模校がいけないのではなくて、小規模校ならではのところを捉えていただきたいということと、将来に向けて人口減、もう仕方ない話です。しかしながら、その特色を活かせるとするならば、今からそういうことをやって、全国から人を集めたい。先ほども出ましたけども、高知県一高い寮がありました。今、町の話では、3万円クラスに抑えようじゃないか、大変助かる話じゃないかなと。ソフトボールで県内でもあちらこちらでソフトをやりたい子どもがいます。やはりその県下、全国を制覇したチームの子が先生として教えておりますので、そういう特色を活かしていただいて、高知県だけじゃなくて、全国からソフトを目指す子どもを受け入れたいと考えております。</p>
	<p>ここ3～4年の動きではございますが、かなり動きが違っておまして、先ほども少し出ましたが、大正中学校のジャズを愛する子どもが高知へ出たいんだというところが、中高一貫、その中で高校でもジャズができるということで3名ほどでしたか、残ったと思います。そういうふうに、やはり皆さん子どもさんが主役です。子どもを主役として何がどうなのかと、この学校は。そこをしっかりと僕たちもサポートしていかないかん。僕らは守り育てる会としては、学校にも何回も足を運んで話をさせていただいています。今後、そのあとの人らのために僕らが今、できることを今からしていかないかんじゃないかな。そのための今の3本の柱ですね、公設塾があり、ジャズがあり、ソフトがある。今は3本かもしれ</p>

ません。そのうち、4本になり5本になる可能性は十分に秘めた学校ではありませんので、この自然豊かな四万十川、東京の方へも僕も今は商工会の方に勤めていますけども、役場におるときに国の方にも行きます。四万十川と言え、という話があります。たくさん全国に売っていける話があるわけですから、そういうことを考えても、今、僕らが何をせないかんと考えます。

先ほどちょっと林元会長の方からも出ましたけれども、ドローンですよ。やはり今回のような大災害が出たとき、そしてうちは林立町。山を見つめるとき、それから自然を今、どのようにそれをどうしていくのかということ考えたときに、もう今からはやはりドローンという世界ですよ。山の集材をする。今までは人が持っていったり、それから飛行機で線を運んで、それから徐々に大きなワイヤーを引いた。今はドローンで今まで何時間もかかったのが、10分でできますよね。今の新しい林業の在り方、四万十高校は大正高校のときに林業科がありました。そういうときも今の林業と前の林業とかなり違ってきたと思うんですよ。だから、そういう新しい林業の在り方を自然環境コースの中に折り込みながら、高校を卒業したときに、また新たな、そういうのを活せるような内容のものを目指せば良いんじゃないかなと考えております。

あとは皆さんが言ったようなことの繰り返しになろうかと思しますので、私の方は学校の特色として3本の矢をしっかりと見据えながら、それを5本、6本の矢にしていきたい。そのようなところに僕たちも力を入れていきたいと考えておりますので、よろしく願いをいたします。どうもありがとうございました。

伊藤教育長

どうもありがとうございました。それでは次に、四万十高等学校保護者代表の林和利様から、ご意見をお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

保護者代表
林和利氏

四万十高校の保護者を代表しまして、本日 PTA 会長が所用で、前年まで会長をやらせていただいた経緯がありましたので、出席させていただいております。

先の3名の方が強く語っていただきましたので、私の方からは少し違う方向で言うと、やはりこの学校が、四万十高校があることで、やはり学ぶところというのが地域にあるというのは、すごく重要なことと思います。保護者の負担、そして経済的なところ、また交通の面なんかのことも考えますと、やはり地域にあるということは1番大前提なのかなと、そこはすべてお三方と同じ意見です。

その中では、先ほど資料の中にもありましたけれども、平成38年ぐらいになると在学する子どもたちが少なくなっていくというのは先ほどの資料の中でも表れていると思います。そこについては、やはり否めない部分もあるのかなと。そうなった場合に、高校として、あまり少人数の中で学習というのがどうなのかというのは少し考えるところはあります。

ただ、そうなので統合するとかということではないですけども、そういう資料について考えていくと、案1から案2のところ辺りには、少し考えていかなくてはいけないものがあるのかなという気持ちがあります。ちょっと役員会等は開けませんでしたので、個々の保護者の意見でありますけれど、やはりそういう部分もあるのかなと思っております。

そして、やはりこの四万十高校の中で生徒たちの思いとしては、希望の進路また就職先、それから進学についても現状のところ、子どもたちの希望に沿ったところには行けるような状況にもなっておりますし、先生たちも、少ない人数というのものもあるかもしれんですけど、行き届いた学習また指導をやっていただいて

	<p>いますので、それなりに先生と生徒が打ち解けながら学習など相談事もやっている、そういうことは大変良いのではないのかなと。うちの子どももそういうことで3年間、今年卒業したですけれども、いろんな面で先生にバックアップしていただきながら、自分の進みたい進路、進学の方へ進めるということもありますので、そういう面ではやはり地域の学ぶ場が近くにあって、また次へのステップアップというの、本人の希望に沿った形に進めたんじゃないかと思えます。</p> <p>もう一つは、先ほど市川さんの方からもありましたけれど、今年うちの子どものことですが、中学3年やって今年4月に四万十高校にも入るようになりました。それについては、繰り返すようになりますけれど、音楽部でジャズをやっていた者が5名、大正中学校におりました。その子たちがすべて四万十高校に行きました。それでその中の子どもたちで実は高知市内の方に行きたいということもありましたけれど、そのジャズを続けてやりたいというような気持ちもあって、四万十高校へ来たら中学校と一緒に勉強ができるということを昨年からずっと1年間ぐらいそんな話もしまして、それを続けてできるというようなことがあったので、最終的にその5名はすべて四万十高校に来て、今も継続して部活動を研究会といった形になっていますけれど、一生懸命、今、中学校と連携してやっています。そういう中高連携のこともあるものですから、行き届いた部分なんかもあって、地元の学校というのが、やはり今後も必要ではないかと思っております。</p> <p>ほかの内容につきましては、先ほどの先に言われたお三方の意見と一緒にありますので、個人また個々の保護者との意見交換のことについて少し述べさせてもらいました。以上でございます。ありがとうございました。</p>
伊藤教育長	<p>どうもありがとうございました。では、学校関係者の4人の皆様、本当にありがとうございました。そうしましたら、ただ今4人の方に、学校関係者の皆様からいろいろご意見をお伺いしましたけれども、今までのご意見に関しまして、ご質問とかご意見がありましたらお願いをしたいと思います。</p>
八田委員	<p>大変、地域から期待されて大変な支援をしていただいているということがよく分かりました。それで、ジャズとソフトボールを鍵にして中高連携を図っていると。これはまさに正しい方向性だと思って、それをぜひ進めていただきたいんですが、大正中学校がジャズということですが、ほかのこの地域の中学校との連携は今、どういうテーマで、特に部活なんですけれど、どこの中学とはどういう部活を受け入れるような形とか具体的な情報があれば教えてほしいんですけど、どなたでも構いません。</p>
市川氏	<p>今、ジャズをやっているのは中学校だけです。県内でもやっていないので特異な状況だと思いますが、他校からもそのジャズをぜひやってみたいという声はぼつぼつと上がってきてますので、今後その領域を広げていながら、寮もあることやし寮費を抑えることで県内、県外からも来ていただけるような仕組みができていくんじゃないかと考えています。今、やっているのは大正中学校です。</p>
八田委員	<p>ほかの中学校と、何か具体的にこういう形で子どもたちが四万十高校に進学するように、というふうな何か今アクションはあるんでしょうか。</p>
市川氏	<p>今の段階では、さっき言ったような形で3本の矢じゃないですけども、実際に</p>

	<p>やはり小学校からずっと積み上げてきたソフトボールを全国1位、日本一にしようというところと、ジャズでというところなんです。今後、子どもさんが増えてきたり、その要望によっては3本ではなくて4本になって5本になったり、子どもに応えられるような学校経営が、地域の力を借りてやれたら良いと考えておるところです。</p>
八田委員	<p>ありがとうございます。とにかくクラブ活動を通して中高連携というのは非常に大きなポイントだと思うので、大正中だけではなくて、地域のすべての中学校と、全部がジャズじゃないと思うんです。この中学校でこういうことを中心にやっている。それは、そのまま四万十高校で発展させてやっていこうっていう道筋ができると、地域の進学率はぐんと伸びるはずなので、ぜひ今後ともご支援いただきたいと思います。</p>
伊藤教育長	<p>ほかにございますか。何か今、関連で何か補足説明はありますかでしょうか。</p>
林健三氏	<p>関連じゃないけど、せっかく会場に見えられている方もおりますので、僕らじゃなしに外野からの意見も聞いていただいたら。</p>
伊藤教育長	<p>最後に、順番でこのあと四万十町からのご意見をいただいたあとで、会場の皆さんも含めてご意見いただくように段取っておりますので。 委員の皆様、どうですか。構いませんか。ありがとうございました。</p>

(3) 四万十町からの意見聴取

伊藤教育長	<p>それでは、ここで四万十町からのご意見をお伺いしたいと思います。四万十町の副町長の森様、よろしく願いいたします。</p>
森副町長	<p>本日、中尾町長、国保連合会の役員会がありまして出張しておりますので、私の方から発言をさせていただきたいと思います。日ごろは伊藤教育長をはじめ、各教育委員の皆様、また知事部局の皆様には本庁の教育全般にわたりましてご支援をいただいております。この場をお借りしましてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。今日は町長の代理ということですので、先週の町長の意見を超えての発言というのは控えたいと思いますけども、その前に通学という点でぜひ四万十高校、今回の豪雨で非常に大きな影響を受けておりますので、委員の皆様に実情を知っていただきたいと思います。</p> <p>7月8日(日)に高知県で初めて大雨特別警報、四万十町に発令をされております。ちょうど県境沿いが非常に雨が強かったわけですが、町内でも大正地区の下津井と、それから十和地区の大道、古城、地吉というところがありますけど、ここで土砂災害警報のレベル4ということで、極めて危険といった状態になりまして、町民の方には避難指示も発令をしたところです。</p> <p>この地域からも、こういった地域からも通学をしている生徒が現におられます。特に予土線については、特別警報の前々日だったと思いますけども、7月6日ぐらいから大雨で運転を見合わせておりました。新聞発表にありましたように、全面復旧には2カ月かかるといった状況があります。愛媛県なんか非常にひどかったということで、先ほど言いましたそういった生徒、自宅から最寄りの駅</p>

までは 20 分、さらに予土線が不通ということですので、恐らく現状では親御さん、保護者の方が学校まで送り迎えをしているということで、1 時間近くどうしても通学にはかかるということです。路線バスもありますけど、なかなか連絡が悪いといったことで、そういった実態があります。

何を言いたいかと言いますと、やはり市川さんもおっしゃっていましたが、県内で非常に広い四万十町でありますので、そういった交通インフラの状態ということのをこれからも想定されますので、災害というのは、そういったことでは何らかの形での地元高校というのがこの地域にとっては必要な現状があるということです。町としまして、一刻も早く JR には復旧と代行運行をしていただきたいということで、木曜日に愛媛県と高知県の沿線の首長が陳情に行くということになっております。

それから 2 点目が、「じゆうく。」の直近の状況についてご報告がてら、お話をさせていただきたいと思えます。平成 29 年度、各地元の方からもありましたように、中高連携校からの進学率は 30% 余りでしたが、今年度につきましては、ジャズの子どもたちの関わり方ということがあって、48% に上昇をしております。町としてはこれをまずは 50% 以上に高めていきたいということで、「じゆうく。」の取り組みもしているところです。現在の「じゆうく。」の登録している子どもたちの数ですけど、四万十高校が 19 人。内訳は 1 年生が 7 人、2 年生が 7 人、3 年生が 5 人といった状況になっております。課題は議会の場でも指摘があったわけですが、十和方面からの通学、通塾生に対しての帰りの便がないということなので、これをできれば 9 月を目途に運転手またはバスの確保をして、何とか、通塾している子どもたちの不便の解消を図っていきたくて考えているところです。

それからもう一点は、これも各委員の皆様ご承知かと思えますけども、来月 8 月 16 日から 20 日間、カナダのカルガリーに語学研修で子どもたちが行くわけですが、11 名、四万十高校からは 2 名、窪高からは 9 名の子どもたちが参加をいただきます。「じゆうく。」については、まだ開塾をしてわずか 1 年 4 カ月ということで、成果を出していくにはまだまだ時間もかかりますけれども、来年の子どもたちがこの 3～4 年の中では最も 49 人という卒業生が見込まれますので、「じゆうく。」の取組をしっかりと子どもたちにアピールをして、地元高校への進学率を少しでも高めていきたくて考えているところです。

それから、去年は窪川中からの四万十高校への入学はゼロでありましたが、今年は 5 名になったということで、こういったことも平成 30 年度の地元中学からの入学の増の背景になっているというふうに考えているわけです。

冒頭申し上げましたように、3 案については前回のこの場で町長より踏み込んだ発言は控えさせていただきましたので、今日は私の方は、これ以上の発言は控えさせていただきますけれども、いずれにしましても地元高校への財政支援というのは町にとっての重要な課題でありますので、これからはしっかりと通学支援であるとか、寮のお話も出ておりましたけれども、精査をしながら可能な限りの支援をしていきたいというふうに考えております。

伊藤教育長

ありがとうございました。前回、窪川地域での中尾町長様からのご発言という内容でということでお話をいただきました。また、通学条件のお話もいただきましたけども、この森副町長さんからのお話につきまして、委員の皆様からご質問、ご意見等ございましたらお願いしたいと思います。

よろしいですか。そうしましたら、森副町長さん、ありがとうございました。

(4) 会場からの意見聴取

伊藤教育長	<p>ここで会場にお越しの皆様からご意見をお伺いしたいと思いますので、ご意見のある方、すみません挙手のうえ、申し訳ないですがお名前を言っていただいからご意見いただきたいと思ひますので。どうかよろしくお願ひいたします。</p>
傍聴者 味元氏	<p>味元でございます。この高校を残すという問題は、もう早くから言われたことです。県の方も20人を切れれば厳しいですよということを聞いて、20人を切らないように一生懸命努力してきました。だけど、何と言っても少ない数の取り合いということで、どこも少ない人間を取るために市内も頑張っております。</p> <p>その中において、四万十高校、公設塾やジャズ、ソフト、これに力を入れております。だけど、このクラブ、四万十高校においては女性のバレーもありました。だけど、ジャズへ5人今回入ってということで、どうしてもバレーの人間が少ないと。そして、ソフトも委員の中からも言いましたが、強いバッテリーは高知高校の方に行き、今、活躍しているのは、本当に大正中学を卒業した人が高知県下で活躍しております。そのようになかなかソフトにしても、そして塾にしても、ジャズにしても特効薬となる、ここへたくさん人間を集めるということには非常に厳しさがあります。</p> <p>そんな中においてこのような会を持ち、四万十高校を何とか残そうと、私も残したいと思っております。だけど、県の方がやってきたこの20人を切ったら厳しいですよということがどうだったのか。これからは行き着くところまでいく。特に国も県も合併の一つ、合併をして失敗だったという方もおりましたが、合併したおかげで今があると私は思っております。このように国、県、合併をしなければ厳しいですよと、かなり大きく合併前には言って、この合併問題が済めば、合併をしなくても生き残るために十分な手立てをすると。このようなことでは、なかなか合併、そして学校の統合についても難しいと思ひますが、県の方として、ここで住民がどうしても四万十高校を残したいということであれば、行き着くところまで、この資料を見れば平成35年ですか、四万十高校が10人ぐらいになるあれも出ております。これでも残してくれますか。そこを聞きたいと思ひます。</p>
伊藤教育長	<p>事務局もちょっと答えにくいと思ひますので、私の方で答えますけども、残してくれますかというその問いにつきましては、分かりません。ただ、20人を切ったらというお話は今、言われましたようにそういうお話で来ましたが、私も教育委員、私も含めて教育委員の皆さんも地域に学校は必要だと、そういう考えは変わっておりませんし、それは持っております。</p> <p>そうした中で、20人を切りながらもいかにこれを回復していくか、または存続していくために、または子どもたちにより良い環境を与えるためにどういうふうなことが考えられるかと。そういったようなことで今日、こういった会も持たせていただいております。</p> <p>地元がとか県教委がとかということではなくて、やっぱり関係者がその知恵を出して力を合わせて、どういうふうにも皆、頑張っていくかということを考えていく必要があると思ひますので、それぞれがそれぞれの立場で役割を持って、どういうふうにしていけばいいかをご検討いただけたらと思ひます。</p>
傍聴者	<p>旧十和の橋本と言ひます。私もかねて四万十高校の農業に関する学科、林業科</p>

橋本氏	<p>というところを卒業して、子どもたち3人のうち2人も四万十高校でお世話になった、そういう時代もありました。</p> <p>先ほどから、ずっと地域の代表としてOB会、父兄会、それとか副町長も含めて5人の方が地元の思いというものを伝えたわけですが、その中で委員さんから何の質問もない。これに対して非常に私は、ちょっと不自然さというか、答えありきでもう決まっているのではないかと、言わなくてももう分かっちゃあよと、そういうことを伝える会なんですか。この5人の方々はそれぞれ一生懸命考えて、県に対して何とか四万十高校をとという思いで伝えたはずですが、それについて何の質問もなかったことについて、一つ教えていただきたいと思います。</p>
伊藤教育長	<p>それぞれの委員が思いがあるかもしれませんが、申し訳ないですが前回、窪川地域でもそういったお話がございまして、窪川地域でもいろいろご質問させていただきたいところもあって、正直言いますと、窪川地域でお話を聞いた皆様の意見と、今回、皆様方の意見、思いは皆様、こちらの地元の方が熱いということは理解できておりますけれども、内容的には同じようなものがありまして、こちらの方でご質問させていただいたということなので、恐らくやや遠慮されてご質問しなかったんじゃないかと思っております。</p> <p>何か教育委員でありましたら、お願いします。</p>
平田委員	<p>先ほどのご発言ありがとうございました。それぞれの学校関係者の方々のお話も聞かせていただきまして、本当に四万十高校を思い、またこの地域の子どもたちのことを思い、お話をくださったということで、内容的に肯定的な受け止め方をさせていただきましたので、あえて質問という形にはしませんでしたけど、しかしこの話を本日、学校関係者も見えていると思いますので、学校関係者と地域と一緒にあって、また子どもも一緒にあって、この四万十高校の重要性というのを考えて、地域で考えていただければ活力ある学校に向かっていくんじゃないかという思いを持たせていただきました。</p> <p>ぜひ、クラブの補助金の問題、通学補助金、寮費の支援とか公設塾の問題、部活動それぞれ力を入れて、中高連携で取り組んでいくという大変心強いお話を聞かせていただきましたので、私もこのことが具現化できますように、委員として支援をしていきたいというふうに思いました。いろいろのお話を聞かせていただきまして、本当に感謝しております。ありがとうございました。</p>
八田委員	<p>市川様が商工会をされているというふうに伺いました。地域の中学生の数からすると将来的によく頑張って10人だと思っんですね。それで、逆に全員来るよっていうのもちょっとおかしい話で、子どもっていろんな多様性を持っているので、でも半分は来てほしいですと。一つの目標だから半分はこの地域で子どもが来る。1学年1学級20人の最低条件っていうのは、これは分校本校、関係なしにこれまでずっと議論されてきたことで、今回それに、単にその数字だけにはこだわりませんということもこれまで議論してきたんですけども、そうは言っても20人っていう数字、明確な根拠は具体的にじゃあ19じゃあどうか、駄目かっていうことではないんですけども、やっぱり高校っていうのは、ある程度大勢で刺激を与えながら勉強しないといけないっていうことからすると、20人を切って持続しても高等教育としての効果は非常に薄れてしまう。何とか20人、何とか20人ほしいと。そうすると、地域外から何とか10人ぐらいを1学年取ってこない</p>

といけないわけですね。

元々、自然環境コースっていうのは、もう四万十っていう日本中に通ずるブランドで良い生徒を取ってこようということが狙いだったはずなんです。でも、今はなかなか上手く回転してなくて、その課題をぜひ解決したいと。その自然環境コースで四万十だから学べるものがあって、それで学んだことを活かして、例えば町としてこれからやっていくいろんな産業、それは農業だけじゃなくて環境ツーリズムであるとか、あるいは環境的な産業であるとか、そういうものとして町の中で雇用の場がちゃんとあって、四万十高校で学んだら、四万十町でこんな仕事ができるっていうような何かあとが見えてくると、それは全国に出てすごく大きな売りになると思うんですよね。なので、高校だけで閉じないで、この地域の将来やっていこうという技術、確かカヌーの話もあったと思います。カヌーのインストラクターになれるとか、あるいはもっとほかのものもあると思うんです。そのネイチャーガイドみたいな資格が取れる。そういうものが四万十高校だから学べる。それはまずは確実に四万十でしばらくは仕事ができる、あるいは全国に行っても通用する。そんな何か形をつくっていかうとすると、実は商工会とか大変重要なお立場なのかなと思いました。何か町に、その県外、県外から四万十に憧れて自然環境に憧れて来た子どもたちが意欲を持って学んで、町に残るような何か方向性というのは何か考えられますでしょうか。突然言って、すぐ答えが出るか分かりませんが。

市川氏

ずっと考えてはおるところですよ。今、ここの町には生態系トラスト協会のネイチャーセンターがあって、それこそ自然ガイドをこれからどうするのか。今、親子研修なんかを最近取り入れて、ここ2～3年ネイチャーセンターの館ができて、すごく活発に動き始めています。

そういう面で見たら、自然を活かして何かをしていくっていう、まさに言われることをどう実現するかっていうのは、商工会の中でもやっぱり業として発生する以上、商工会になっていくでしょうし、考えてはおるところなんです。ちょっとそのキーワードが、そういうネイチャーセンターとの連携、それから重要文化的景観という重要構要素ということで、この周辺にある山、例えばここから20分入ったところの市ノ又の自然林、これは50haぐらい、これを林野庁にお願いをして活用しては、これは自然林でヒノキの純林、約四百何十年というのがあります。

そういうところを考えたときには、あらゆるセールスの仕方があるんじゃないかな。セールスするという以上は、そこをきちんと説明する人が要る。そういうことをどういうふうに導いていくのかというのは、まさに自然環境コースの使命ではないかなっていうふうには考えます。

学校はそれを指導してくれる先生が必要です。先生っていうのは特殊な先生になりますので、そこら辺りをちょっと考えていただいて、自然環境コースを伸ばすための方策を県教委の方で一つ頑張ってもらいたいなと思います。

9月やったかな、NHKがヤイロチョウを調べに来ておったようです。ヤイロチョウといえば、やっぱり絶滅危惧種で県の鳥でもあるし、四万十町の鳥でもある。そういうことがぺらぺらと喋れるような子どもができて、それに四万十川に行けば鮎に会える、ウナギに会い何ができるっていう、そのほんなら漁の仕方はどうするのかとかいうようなとこまで踏み込んでいけるような、だから水族館はないけど、皆、水中眼鏡かけて入りましようや、これ水族館じゃないのっていう、

	<p>だからそこで説明ができるような生徒ができれば楽しいんじゃないかなと。</p> <p>淡水魚の水族館がやりたくて考えましたけど、いちいち何十億もかけて年間に何億も経費がかかるのではなくて、川に入って水中眼鏡一つ、1,000円の眼鏡をかけていけば、そこには魚がたくさんおりますから、そういう楽しみ方もあるんじゃないかなと。そういうことを指導できる人がおれば、すごく楽しいんじゃないかなと思いますので、できればそういう方向もありと思っています。</p>
八田委員	<p>ありがとうございました。教員の確保もまさに学校側の重大な仕事だと思います。実は自然環境っていうことに憧れている高校生、大学生はたくさんいるんです。環境的な学部だとか学科っていうのは結構できているんですけども、概ね人気がないんです。なぜかと言うと、出口がはっきり見えないからなんです。例えば自然エネルギーとか環境という分野を実際にやるのは、従来の、例えば電気であったりほかの分野の技術者が本業をやってしまうので、そうするとその境界領域を選択したあなたは一体何ができるのっていうところが、出口が見えないことが不安なんですね。もし、自然環境のことをしっかり学んで、その中で働ける場所があるよっていうことが見えてくると、これはすごく大きな領域で、四万十高校に県外から来るための一つのそのポイントは、そのあと四万十町で働ける、こんな仕事があるっていう仕事づくりがすごく重要だと思います。ぜひ、よろしくお願いします。</p>
傍聴者 伊賀氏	<p>伊賀と言いますが、私が四万十高校のPTAの会長を十何年くらい前にやりました。その時分に自然環境コースでかなり全国から来ていただきました。そのときには結構、その学校のトップクラスというか、結構、出来の良い子どもたちが来ていただきましたが、いかんせんちょっと県教委にもお願いをしたことがあります。自然環境コースを科にしてくれんかいうて、出たときにどうしても自然環境コースではあるけど、卒業証書は普通科になってしまうので、やっぱりその部分があると、まだ大学とか何とか行って、次のステップを踏むにしても普通科の卒業証書で行くようになりますので、そこら辺の部分を頼んだときには、やっぱりあの時分では先生を確保するのが難しいから、そういうことはできません。やっぱりこれから全国から子どもを集めてくるって言うたら、やっぱりコースでは弱いから、科にしてほしい。そこは昔からかなり頼んではみましたが、その時分には全然そういう部分にはならなかった。</p> <p>そういう部分をこれから伸ばしたいという部分でしたら、やっぱりかなり特徴のあるものを持ってこんといかん。そこには、ここに集まっている地域の人ではなかなかどう言ったらいいとか分からん。やっぱりこれぐらい減ってきたときに県の教育委員会とかそこら辺が、減りゆうぞ、どうしたらええろうということのをそっちからもこうしたらええ、こうしたらええろうかというのを投げかけてほしいというか、そこら辺がほしいです。以上。</p>
傍聴者 須内氏	<p>大正中学校で勤務しております須内と申します。よろしく申し上げます。</p> <p>私も4月から赴任してなんですが、四万十高校との連携、中高連携、本当にお互いに県から加配もいただきながら連携の事業乗り入れだったりとか、そういうことを進めています。それから今もたくさん出てまいりましたけれども、子どもたちが高等学校へ進学するのに、自分が培ってきた、中学校時代にやってきたものが継続して高等学校でできるということがすごく大きいかなということ是非</p>

伊藤教育長	<p>常に、赴任して本当に数カ月ですけれども、すごくそれは実感として伝わっています。ぜひ、こういったことを伸ばしていただければありがたいなということを今、思う次第です。以上でございます。</p> <p>ありがとうございました。もう時間的には予定の時間になりますけれども、この意見をここだけは発言しておきたいという方、いらっしゃったらお願いしたいと思います。構いませんでしょうか。ありがとうございます。</p>
-------	--

(5) 教育委員による協議

伊藤教育長	<p>そうしましたら、協議に移りたいと思いますので、委員の皆様、ご意見のある方、ご発言をお願いいたします。</p>
木村委員	<p>今日は本当に貴重なご意見ありがとうございます。地域に学びの場を残すということは、その地域の活力を残していくということとまるでイコールだと思っております。ただ、それだけじゃなくて地域で学んだ子が将来、この地域の次を担ってくれる子どもたちを育てていくんだという意味合いでも、本当にそれぞれの地域に学校があるということは必要なことだと認識をしています。</p> <p>ただ、果たして持続可能な存続の仕方があるんですか。そこにただ単に残すというだけでは難しく、仮に将来的に人数が少なくなっても、持続的にその地域にその学校が残っていくということをどうやればできるんだろうかということをもっともっと議論して、最も良い案を考えていきたいと考えました。</p>
竹島委員	<p>5人の皆さん、本当に今日はいろいろな意見をありがとうございました。私も県外や高知市内から生徒が学生時代だけここにいるというのは、本当にもったいないことだと思うので、もっとその地域の魅力というものをたくさんつくってもらって、来た生徒がここに残る、そしてここで結婚して子供を産んで、次の世代へ通じるような、木村委員さんがおっしゃったような一時的なものではなくて、これから四万十町が活気づくような、皆さん最初に言われていましたように、知事もやっぱり学校がなくなるということは、その中山間の地域が衰退していくことをすごく言われていますので、ぜひ私たちもその方向で頑張りたいと思いますので、よろしく申し上げます。本当に今日はありがとうございました。</p>
中橋委員	<p>今日はどうもありがとうございました。私もその地域に学校というものを残すというのは大変重要なことだと考えています。市川さんですかね、冒頭におっしゃられたのが印象的だったんですけど、四万十町の広さが淡路島より大きいということ。大きいなど、広いなどは思っていたが比較をされると、ああ、そうなんだと。淡路島より広い地域なんだと。そうであるからこそまさに、その地域に学校を残すということがより重要なんだなというのを今日の話を通じて大変感じたところです。皆様の方が地域で学校を支援してくれる体制を築き上げているという、まだ発展途上というところですかね、いうところなんかもお聞かせいただいて大変勉強になりました。</p> <p>ただ、一方でご指摘もありましたように、生徒の減少ということは否めないところかと思えます。参考資料の2を見ても平成31年以降、この地域、旧大正町、十和村の卒業生を見ても合計でこの二つの町村で49名、31年には49名、32年</p>

には 33 名というふうに、全員が入ったとしてもそれぐらいの人数になるという現実があるという中で、バレーのチームが組めないというようなお話もありましたけれども、やはりジャズ、ソフトボールに力を入れるということは大変重要なこと、3本の柱とおっしゃっていましたが、柱として重要ではあっても、そうではない別の部活をやりたい子、別の活動をやりたい子っていうのもたくさんいると思います。そういった子どもたちも取り入れていかないと、やはり学校として成り立っていかないんだろうなということも感じました。

今日のご意見の中で具体的な案のお話もありましたけれども、私自身は今日のお話を伺って、この三つの案を提案させてもらいましたけれども、私は第2案なのかなというのを今日のお話を伺って強く感じるようになりました。以上です。

平田委員

ありがとうございました。私も実は教員あがりです。私、現職時代に岡豊高校ができたり、高知南高校ができたころには、生徒急増期で大変、教育についても右肩上がりだったのではないかと思いますけど、現在、本当に門脇同窓会長さんがおっしゃられましたけど、生徒数の減少は気になっているという、私もこのことは大変気になっております。この人口が減るっていうことは、さまざまな点でやはり今まで日本が経験しなかったこと、地域が経験しなかったことを、それをクリアしていかないといけないんじゃないだろうかと思っております。

お話の中で本日、さまざまなお話がございましたけど、地域として、地域に情報発信することで町民の方々にも参加をしていただいて、四万十高校の活性化に向けて議論も進むのではないだろうか。やはり、経済状況も含めて地域から教育の場をなくすということは、いろいろと問題もあろうと。お話によりますとキャンパス制はどうかというようなこともありましたし、今日いただきましたことをさまざま観点から考えて、私として最もこの四万十町にとって高等学校の在り方について考えて、今後意見を述べていきたいというふうに思いました。本日は貴重な意見を聞かせていただきまして、本当にありがとうございました。

伊藤教育長

ほか、よろしいでしょうか。

前回の窪川町での会、今回大正地区での会と、皆さん方たくさんご意見をいただきました。ご意見いただいた中で、案の3で良いですよというご意見はございませんでした。今、教育委員の各委員のお話を聞く中で、案の3で、いわゆるその統合というお話については、皆さん最終的にはそれぞれ各地域に学校が必要だというようなお話の中で、ということですので、案の3については今回、この議論の中では無いんだというような形にしていきたいと思っております。

いくつか案の2もというようなお話もありましたけど、木村委員からありました持続的に学校を残していくというお話があったり、それから町としましても、先ほどから何回もお話出てきますけども、非常に高校の存続、学生の支援に対してのご努力もしていただいていると。それから地元の方々も、もちろん学校もその3本の矢を中心にいろんな取組もされているというようなところでございます。

そういったようなことから、なかなかこの場で、ここで案のじゃあ1か2かという結論については、もうちょっと議論を深めていきたいと思っております。四万十町で2回お話を皆さんからお伺いして、そして教育委員との協議の中では、そういう1か2に絞ったという格好でいけるのではないかと思いますけども、今日のまとめ、そんなところでよろしいでしょうか。

各委員	(了承)
伊藤教育長	そうしましたら、皆様方、大変ありがとうございました。ちょっとまだ改めて教育委員会協議会の中で議論をさせていただきますけども、案3についてはこの議論の検討からは外していきたいと思っておりますので、どうもありがとうございました。

【閉会】

伊藤教育長	事務局の方から何かございましたら、連絡等ありましたらお願いします。
山岡企画監	9月に教育委員会協議会を開きますけれども、その手前にどういった形にするのかについてはまたご連絡させていただきたいと、日程調整させていただきたいと思っております。以上でございます。
伊藤教育長	それでは、以上で本日の教育委員会協議会を終了いたします。どうも皆さんありがとうございました。